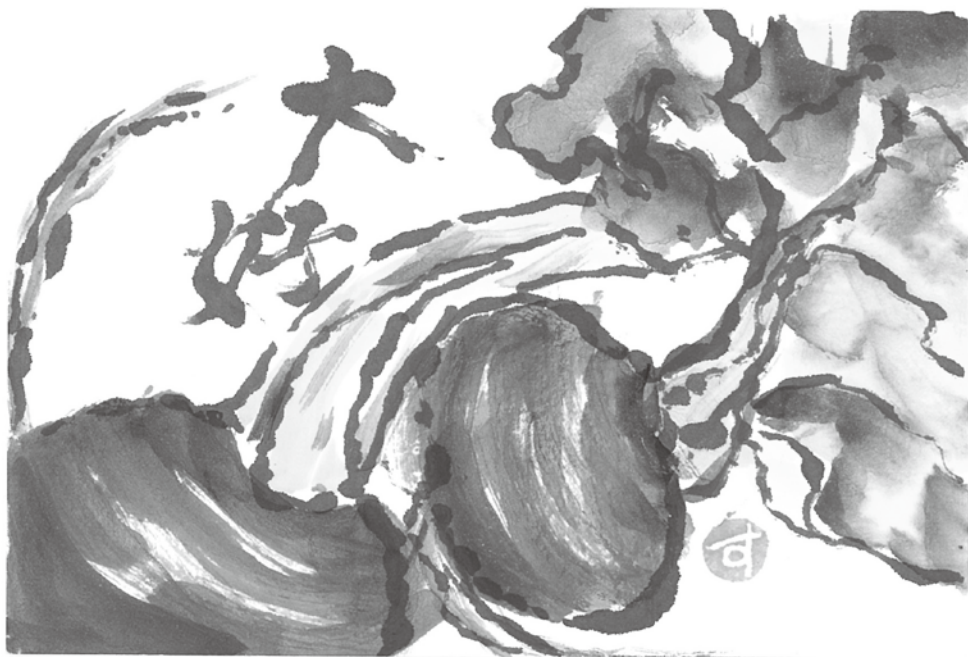


評

論



教室「道草の詩」^{うた} 小川 鈴江

郷土山武の源流（玉の浦）を辿る

成東 金田 弘之

伝承 国道一二六号線と木戸川が交差するその一隅にひっそりと佇む安房神社。ある郷土史家が「柴原にはなぜ安房神社が存在するのか？」と疑問を投げかけた。一見すると不思議な場所にみえる。

社記は『開拓』の二文字を記し、宮司は『阿波国（徳島）から来た』と代々続く伝承を紹介する（阿波を強調）。

別の民族史家は「昔ある一族が駒野（高富）に上陸した。一面に密集した葦をかき分けて進んだため葦の片方が擦り切れてなくなってしまう。今でも駒野（高富）に生える葦は片葉になっている」と『葦の方葉伝承』を紹介した。

海退により平地化が進んだ現代の九十九里平野。内陸部の開拓や上陸は、木戸川流域に残る古墳時代の伝承を示している。伝承の背後に一体何が存在していたのだろうか。

地勢（地形・地名） 両端に玉前たままへ（崎）神社が鎮座する

九十九里平野、かつて『玉の浦』と呼称され、ラグーン（湖沼や湿地帯）が延々と広がっていた（古墳時代）。

『玉の浦』のほぼ中央部には、木戸川・境川・作田川の

三本の川が、台地上からラグーンに流れ落ちていた。

一方、房総半島の沿岸地域を北上する海流（黒潮）が、満潮時には、南白亀川や真亀川付近など当時の海峡を逆流し、玉の浦（ラグーン）を北に向かって遡上した。

丘陵端の岩塊に激突を繰り返してゴーゴーと流れたと伝わるが、成東（鳴涛なると⇩浪切不動）、早船（船が速く進む）、富口（白波が富む）、島・崎などは当時の海流現象を彷彿とさせる地名の名残である。鳴涛は鳴門（阿波国）の渦潮が源流である（天富命率いるインベ氏が房総に向けて出港した吉野川河口周辺⇩鳴門海峡）。

徐福伝承 今から二二〇〇年ほど前（BC二〇〇）になるが、徐福は始皇帝（秦）の許しを得て、不老不死の仙薬を求め東海（蓬萊峽）に渡り、最初に上陸したところが筑紫国（筑後川下流域⇩佐賀市諸富）であったという。

徐福率いる船団が上陸した筑後川流域に伝わる『葦の片葉伝承』は郷土・駒野（高富）の『葦の片葉伝承』とほぼ同一内容で、九州にその起源を求めることができる。

かつて『玉の浦』と呼称した郷土の古地名は、長崎（福江島／五島）と和歌山（太地町）に現存する港名（古地名）でもある。

『玉の浦』は船団を率いて東土（房総）に向かったインベ氏の開拓ルート（筑紫国⇩阿波国⇩紀国⇩安房国⇩

郷土)に重なる。

安房神社 神社記は「柴原は地名の起こりで開拓の際に安房神社を勧請した」と記すが、『柴原』の地名には原野(荒場)のイメージがあり『開拓』を連想する地名である。祭神ではなく氏神(祖先神・天太玉命)とし、地名の由来や開拓を記す社記は他社とは異なる。

安房神社は、台地から落ち込む木戸川の流れと満潮時に遡上する海流が合流した場所にあり、長い年月によって形成された砂洲上(第一砂堤群)に鎮座する(現在の標高一〇m)。

一七〇〇年前の神社前面はラグーンが拡がっており、隣接する田越(たこえ)はアイヌ語のタツプ(突端)コップ(瘤)エ(江↓港)で、「瘤のように突き出た所の港」が訛ったものという(例・竜飛岬↓タツプ岬↓突き出た岬)。地形的に見ても港(江)に適した所であった。

社記と地勢から分析すれば、安房神社は郷土(山武市)では最も古い神社(約一七〇〇年前)で開拓の原点になった所とみられる。「安房神社を創建した人物は阿波国(徳島)から渡った」とする柴原伝承を尊重すれば、インベ氏(天富命とその一族)であろう。

東土開拓 神武天皇は日向国(宮崎)から筑紫国(福岡)を経て、東の国(畿内)に向かって東征を開始した

(三世紀終末)。

『古語拾遺』は、東征に先立ち天富命を召し、「阿波国(徳島)に先行して五穀や麻を準備し、開拓のための道具を整え、東土(房総↓安房国)に向かい豊かな国を造りなさい」と命じたという。

天富命は系譜上、斎部(インベ)氏の祖・天太玉命(本貫は筑紫国、天照大神の葬送にあたり祭祀を執行した人物)の孫にあたる。

大航海 『古語拾遺』は「…天富命は更に沃壤(良い土地)を求めて阿波のインベを分けて東土(房総)に行き…」と記す。

阿波インベ氏は海洋民で楫取船により吉野川を自由に往来していたという。多様な機能を有する職能集団で、自活(生活・活動)を可能にする『自己完結型の船団』を編成することができた。

天富命が導く船団は五穀(米・麦・粟・黍・豆)の種や麻・杉の苗を準備し、工人(土器・神殿・船などの製作)を引き連れ、三々五々吉野川(阿波国)を出航、まづ玉浦港(紀国)に集結した。

玉浦港の突端・カンドリ岬から太平洋を黒潮に乗り、昼ははるかに見える富士山を夜は北極星を羅針盤として、幾多の混乱を乗り越えながら太平洋を航海したことであ

ろう。

布良崎（館山・布良崎神社）に上陸した天富命は、房総各地に進出して開拓を進めたと伝えられる（東京湾岸や太平洋沿岸に分布。南房総市の富山は天富命が房総開拓の指揮をした所という）。

房総の太平洋沿岸を北東に回るルートでは、半島の東端（太東崎）に到達し、延々と続く広大なラグーンを眼下に臨み、『玉の浦』と命名したのであろう。

天富命が率いるインベ氏は、さらに東進（航海）を続け、『玉の浦』の中央部にあたる郷土・駒野（高富）の微高地に上陸した。

駒野（高富）の『葦の片葉伝承』をはじめ、柴原を中心に分布する郷土の古地名（富口、高富、富田）は天富命（富）に由来する地名・伝承の名残であろう。

郷土の開拓 駒野（高富）の『葦の片葉伝承』は、開拓のために天富命が導くインベ氏集団（船団）が上陸した地点（小島）と考える。

木戸川流域を起点にして玉の浦（九十九里平地）の開拓が始まったとみられる。

地名や伝承を考察すると、穀物の種を植えた所を富田、麻を植えた所を麻生・和田（麻綿）、杉を植林した所を板付・森、そして漁業地を高富・富口に定めたのであろう。

これら地域には三本の川（木戸川・境川・作田川）が丘陵台地から玉の浦（ラグーン）に流れ落ちており、開拓（生産活動）を行うには最適なところであったに違いない。

重圏文鏡 古墳時代前期（四世紀前半）に造営したとされる北野遺跡五号墳（森台遺跡）から重圏文鏡が出土しているが、鏡には人骨片が付着していたという。被葬者は亡くなる際に鏡を抱いて埋葬されていたという。死出にあたり旅路の安全を鏡に託したのであろうか。航海の安全を祈願し鏡を体に巻き付け、黒潮に乗り東土（房総半島）に渡った若き日の記憶を葬送の場で求めていたのかもしれない。鏡は災いから身を護るためのものであった。

重圏文鏡は北部九州が起源とされる（二世紀造営の福岡県三雲南小路一・二号墳）。

房総出土の重圏文鏡は五点ほど確認され、いずれもインベ氏開拓地に重なると思われるが、古墳から出土した重圏文鏡は北野遺跡五号墳のみで北部九州の墓制に一致している。

しかも郷土の方墳（北野遺跡五号墳）は、大きさ・形状・出土遺物が平原遺跡一号墳（福岡県平原市）に驚くほど酷似している。

平原遺跡一号墳を天照大神（卑弥呼）の墓に比定する研究者が多く、筆者も賛同する。

インベ氏の祖・天太玉命は祭祀（天神地祇てんしちぎという道教の祀りごと）を執行した人物で、天照大神の葬送には、鹿骨を焼いて占い、太御幣ふとみでくばを用いてお祓いを執り行つたと記されている（古事記・天の岩戸）。

ちなみに、平原遺跡一号墳と三雲南小路一・二号墳は目と鼻の先にあり被葬者は同族の統治者であつたとみられる。

インベ氏は、天太玉命が執行した祭祀（天神地祀）を一族の権威（精神的支柱）と考えていたから、平原遺跡一号墳を現地視認したのち東土（房総）に渡つたのであろう。

北野遺跡五号墳の被葬者は、インベ氏（天富命の近親者）であつたと考えたい。

郷土の源流 房総にはかつて『房総風土記』が存在したといわれるが、長い年月の間にそのすべてが失われてしまつたのであろうか。

しかし、失われた風土記は神社記、伝承、地勢（地形・地名）の形で今日に継承されているであろう。

諸記録・伝承・地勢の比較研究により、郷土開拓の骨格が見えてくるに違いない。

そのように考え、『インベ氏』に焦点をあて、先人が辿つた道を多様な角度から検証を重ね、一七〇〇年前の郷土（玉の浦）像を再現してみた。

郷土の伝承や社記を古代史の骨格と対比させると、因果関係が認められ、郷土の先人は重要な役割（技術・文化・生産の伝播）を担って活動していたことが読み取れる。

科学的思考法と情報解析技法により、人々の生活が燦然と輝いていたことを検証・再現（民俗史）したい。

（続）

〈主要参考文献・資料〉

- ・ 「房総そして玉浦（武射）をつくつた一族」
- ・ 『日本の建国と阿波忌部』 林博章

真の偉人とは

五反田 竹内 克隆

日本全国津々浦々、過去から現代まで政界・学術界・財界・スポーツ芸能界等々、各界に偉人と言われる人は数多^{あまた}であり、時代の要所でその活躍や存在感は大きい。山武市にも立派な業績を残された人を、後継子孫の方から本誌を通じて知ることができ、山武の偉人として銘記した。

さて、偉人とは具体的にどんな人なのか、素朴な疑問で辞書を引いてみると、「すぐれた業績を成し遂げた人。偉大な人」となっている。さらに偉大で引いてみると、「すぐれて立派なこと。大きく立派なこと」だった。

明確性に欠けるようだが、一般の人に比べて抜きん出た功績を挙げた人や存在の人を総括して偉人と称するのだろうか。

私の偉人観は、真にそう呼ぶに値する人かどうかである。それには社会貢献が最優先と考える。社会のため、人々のために粉骨砕身、多大な恩恵をもたらした人。こういう人こそまさに偉人と言えるのではないか。ノーベル賞のように万人に尊敬・称賛される人を別にして、安易に偉大だから、有名だからで決めつけてしまうのは偉

人の安売りのようで、その威厳や値打ちが低下すると思つてしまふ。

話を武士の時代にタイムスリップする。この時代の偉人たちは教科書や小説、ドラマなどでお馴染みで、その歩みは歴史の表舞台と認識して真偽などは疑う余地もない。なぜなら史実を知るはその時代に存在していた人たちだけであり、知らない後世の人間はそれを受け入れるだけである。

歴史には表があれば裏もある。そして、知名度も薄く裏舞台と言える中に、さがし求めていた本当の偉人を知った。その話を歴史学者・磯田道史^{いそだみちふみ}さんからいただいた時、かつてない感動と尊崇の念が止まらなかった。そんな先達の二話を著書『無私の日本人』をお借りして紹介してみたい。

明和三年（一七六六）のこと、大藩の仙台藩六十二万石の城下に帰属する小さな宿場「吉岡宿」では、重税による貧困に喘^{あえ}いだ住民が転出を重ね、宿の存続が危ぶまれている。その時、この宿場町の救済に立ち上がったのが二人の男、温厚篤実^{ぬくもりのことくへい}なりリーダー穀田屋十三郎^{こくたやじゅうさん}と吉岡宿一の切れ者菅原屋篤平治^{すがわらやとくへい}であった。二人は同志を募り宿

の有力者九人がそろった。

彼らが立てた救済策は奇想天外、何と千両の大金を作り、それを仙台藩に貸付けて毎年一割の利息を取って宿の民に配るといふ離れ業であった。当時、藩は参勤交代などで財政難であり資金需要は必須、勝算ありと見込んだのであった。

計画は進み九人はそろって私財を供出し、不足分は豪商から借りて千両の元手を完備した。だが、ここからことは簡単には進まない。奉行、代官など武士とのやりとりは難関を極め、計画が本丸（殿様）に到達するのは至難の業である。

何度も頓挫しかけたが、不屈の精神は揺るぎなく、「身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ」、苦節三年ついに悲願成就の道は開けた。吉岡宿に利息金が届いた。

時の藩主は名君と呼ばれた伊達重村で、書の達人でもあった。領内巡回の折に吉岡宿に立ち寄り、大店の酒屋（九人の中で最大の資金供出）に上がりこんで、「霜夜・寒月・春風」と書き、酒銘とするよう言い残した。殿が名付け親のこの酒は飛ぶように売れたそうだ。

立ち直った吉岡宿は江戸時代を通じて人口も減らず現代に至っているという。この九人の話は、『国恩記覚』という資料集としてこの町に残っている。

その人は寛政三年（一七九一）京都に生まれた。高貴な血筋を引き天性の才能を有し、絶世の美人とも言われながら数奇で壮絶な生涯を送った人、大田垣蓮月おたがきれんげつである。二度の結婚も夫、子供と死別し、恩人でもあった最愛の義父も逝き、孤立無援になった蓮月は四十二歳であった。

しかし、ここからが神と崇められた人生後半が始まる。すでに歌人として名を成していたが、豊かな才能は陶器の製造に向かい大成功を得た。きびしよ（急須）の製造で自詠の歌を彫りつけたのが大ヒットとなり、「蓮月焼」として日本中に知れわたった。蓄財も成したが私的には一切使わず清貧を貫き、衣類は着たきりで家具もなく、粗末な茶碗だけだったと言われている。

次々に篤行とくこうがつづく。蓮月の元に同居して製造を手伝った少年を、後の文人画の大家・富岡鉄斎とみおかてっさいに育てあげた。京都に飢饉が起こり人々の苦しみをみて、奉行所に匿名で三十両（今のお金で約一千万円）の寄付を届けた。歌集の出版は差し止めて名誉を求めず、短冊などに歌の記入依頼があれば無償で書いた。さらに乱流する鴨川に通行人の難儀をみて、十年かけて「丸太町橋」を完成させた。そして極めつけは、江戸討伐に向かう西郷隆盛に送った歌であろう。

「あだ味方 勝つも負くるも 哀れなり
同じ御国の 人と思えば」

西郷の変心を促したのは、勝海舟や山岡鉄舟でもなく蓮月の歌であったと言われる。こうして江戸は炎上を免れたのであった。

明治八年（一八七五）十二月、病に倒れ八十四年の生涯を終えた。遺産といえるものはほとんどなかったという。

「蓮月さんは活きた神様でした」
人々の涙は止めどなくつづいた。

「願わくは のちの蓮の 花の上に
曇らぬ月を みるよしもがな」

私はこの辞世の歌にすべてを成し得た満足感と、安寧の来世への願いと、ようやく訪れた自身の安らぎをみた。

ものすごい先達たちである。これこそ真の偉人、ほかに言葉があるうか。

無私とは私心のないこと、磯田さんはこのように語る。
「ほんとうに大きな人間というのは、世間的に偉くなら

ずとも金を儲けずとも、ほんの少しでもいい、濁ったものを清らかなほうにかえる浄化の力を宿らせた人である」

今の世にこのような人がいるだろうか。さがし出すのは無理であろう。いるはずがない。

磯田さんの著書を通じて、このような先達が実在したことを認識できたことは、じつに幸運であった。

・ 出典 『無私の日本人』磯田道史著

文春文庫

知るは人生の樂しみ也 (二二)

富田 大高 栄一

タコやイカの心臓は三つあるという。一つは血流を循環させ、他の二つはエラ心臓と称され、少ない海中の酸素を取り入れている。

筋肉質のイカは時速四〇kmというスピードで泳いでおり、小学生の解剖は蛙からイカに代わっている。新鮮なイカの血液が青いのは、酸素と結び付いている証拠という。人々が水族館でイカに魅入られている訳は、カメレオンも顔負けの一瞬で変身する見事さに心を奪われてしまうからであろう。イカの口を「カラストンビ」と称するのは、固く鋭いカラスヤトンビのクチバシに似ているためだ。イカも干物にすると「スルメ」と呼び名が変わるのは、結納目録として「寿留女」・婿養子には「寿留芽」と記入され、「昆布」は「幸運夫」等語呂合わせの良さによるものである。ギャンブラーはスルメを「する芽」と嫌い、「当り芽」と縁起を担いでいる。

タコの頭と称しているのは胴体で、内臓が納まっており、八本の腕は口のまわりに生えている。西洋ではイタリア・ギリシャ・スペイン以外はデビル（悪魔）と嫌われている。日本で合格祈願の縁起物とされている訳は、

「オクトパス」と発音されるので「置くとパス」という語呂合わせの良さのためだが、オクトパスとはギリシャ語で「八本足」という意味である。ちなみに「絵馬」とは、古来は白馬を奉納した大願成就を祈願したことにより、現在では五角形の板に白馬を描いたものに、必勝祈願等の願い事を記入して奉納しているが、五角形なのは「五角(合格)」の語呂合わせによるものである。

地名も好字にかえられ元の意味が失われたものが多く、「湯坂」の地名も温泉とは無関係であり、戦前には泉の湧く場所があり、成東高校の周辺水田にまで役立てられていたのが、現在では開発で失われているという。そのため、台地の地圧による「湧坂」という「坂下の泉」による変化が考えられる。

「稲毛」の地名も「モミの野毛」による意味にとれるが、現地を見れば水田は見られないのも当然で、下総台地からなる土地である。「禾偏」の字源は、象形文字では稲によるものではあるが、現在の稲には野毛が見られぬが古代米は麦のように長い立派な野毛が見られる。稲毛の地形を見ると、台地は防砂林の松林が続き、その下には海岸の砂浜が続いていたが、現在では遠浅の海岸は埋め立てられ、立派なビルの近代都市群になってしまった。昔の面影は失われており、「稲毛」とは「砂木」に

よることが考えられ、「防砂林」であり、砂いなとは方言である。

九十九里浜の砂丘も砂が飛んだ後は美しい風紋と化すが、海水浴に来た子供は、六五度を超える熱さに泣き出す始末だが、これは玄武岩による砂が砂鉄を含んでおり、熱を吸収するためである。関西方面の砂浜が白いのは花崗岩のためで、太陽光を反射しヤケドをするほど熱くならず、沖縄やハワイの輝くばかりに白い砂浜はサンゴによるものである。

戦後の成東海岸に進駐軍の兵士が海水浴に訪れたのは、マイアミビーチに似ていたためで、赤や黄色の海水パンツで泳いでいたが、女性顔負けのカラフルな色模様で違和感にドギマギさせられたのも道理で、こちらはてぬぐい仕立てのフンドシで泳いでいたからだ。

八月三日から行われる秋田の竿灯は、仙台の七夕・青森のネブタと並ぶ東北三大祭の一つで、二百五〇年の伝統を誇る。二百本以上の竿灯が妙技を競う幻想的なゆらめきは夏の風物詩となつて、全国から見物客が押し寄せ盛況ぶりはしばし暑さを忘れさせる。

竹竿に四六個のちようちんを九段に分けて稲穂をあらわし、高さ一二m、重さ五〇kgをはんでん姿の差し手が、夜の大通りで、額・肩・腰へと、ドッコイシヨの声援に

合わせ、見事な技を展開していく。これは邪気払いと豊作を願った大切な神事なのだ。

神様を呼び出す神事に、一二個の鈴をつけた「神楽鈴」の形も立派な稲穂をあらわしており、神楽鈴を鳴らす獅子舞も邪気を払うものである。「柿が鈴なりだ」という言葉も神楽鈴によるものなのだ。

玄米を精米すると一〇%は糠ぬかとなるが、その中には米の栄養源の八〇%を占めているほど栄養価に富んでいるという優れたものである。字源を見ても「糠」とは「米偏」に「旁つくり」は「康やすらか」で健康に貢献しており、ヌカ漬のタクアンが美味で健康食なのも発酵食品だからだ。「粕」とは「米が白い」という訳で、「白米」のことを指摘されているようだ。「お茶」は日本人と切り離せないほどおいしいが、茶滓ちんかすは捨てているものの、まだお茶の成分が七〇%も残っている。昔の人はごはんの中に炊き込んだり、煮しめにして食べていたが、繊維も多く健康のためにも理にかなっていたのだ。

日本酒の酒粕は甘酒や奈良漬けや魚の粕漬け等に利用され、一段とレベルアップした製品として食べられているが、他のウイスキー、ブドウ酒、ビール等、酒粕は食べられていない。

日本人はこの県へ出向いても水が飲めるが、これは

四面海に囲まれているため雨量が多く、地形の七割は山と森林に占められており、降った雨は斜面を流れ込み海へと注ぎ込まれている。そのため地下水は新鮮でおいしく飲めるのだ。大陸の水が飲めないのは雨量が少なく、川や地下水脈にはカルシウムや鉄等の鉱物質(ミネラル)が多く溶け込み、胃腸が受け付けないからである。茶葉を発酵させたウーロン茶や紅茶が愛飲されているのも、日本の緑茶では成分が溶け出さず飲めたものではないからだ。こんこんと湧き出る北海道の水源が、中国資本に買い占められていることは見逃せない事実である。まずは大切な水資源として世界中から羨望の的であることを実感していないうちに買い占められては、子孫に禍根を残し兼ねぬことが見て取れる。

ヨーロッパでは、食事中に水の代わりにビールやブドウ酒を飲むが、国策としてアルコールが安価に利用できるようにしているため、水より安いのである。西欧人は、体質的にアルコール分解促進酵素に恵まれているためアルコールに強く、ドイツでは家族同伴なら一四歳以上・友達同士なら一六歳以上が、ビールやブドウ酒を食卓で飲むことが許されている。そのため。アル中の人が多くいるという訳である。「海神ネプチューンによる溺死より、酒神ヴァッカスにおぼれる人多し」という訳で、ア

ルコールには御用心。

ロシアのプーチン大統領は、ウクライナを廃墟と化し、尊い人命と貴重な文化遺産を失わせている。都合の良い言葉を並べ正当化を主張しているが、代え難い宝物が消えてしまったことは残念至極である。古代ロシアの歴史を見れば、中近東の東スラブ人にたどることができ、「スラブ」とは「奴隸」を意味するように、古代ギリシヤの繁栄のために血の汗を流してきたという暗い過酷な歴史が潜在的遺伝と化し、心まで歪ませているのではあるまいかと疑いたくなり心痛むこの頃である。

破傷風血清療法を確立した北里柴三郎は、二〇二四年には新千円札として登場する。裏面に描かれた世界的に高く評価されている北斎の「神奈川沖浪裏」の大迫力の大巻き波は、サーフィンでも分かるように浅瀬に打ち寄せる大量の海水現象で、沖では有り得ない景観も、芸術的許容内の浮世絵によるものであろう。

伊藤左千夫を知らぬ市民はいないが、正岡子規没後の文壇は山武市が表舞台となっていた。左千夫が主導し、蕨真一郎が資金援助することにより、歌誌「阿羅々木」が発行され文学界の注目の的となっていたのである。

「阿羅々木」と称したのは別名「一位の木」とも称され、古来高貴な人の筋しぢに用いられたことから、文壇でも一位

にあやかるようにと名付けられたと文学者の土屋文明の主張が定説になっている。

これから述べる説として、「阿羅々木」とは「蘭」を意味する言葉に注目して見たものである。蕨家と大高とは同じ家業である林業・酒造業に加え警察権を与えられていたところから「お代官」、「殿様」と尊称されていた。

大高家も収獲前には長屋門前に責め具を虫干ししており、処刑人は六角堂に安置されたところから、現在でもおみこしはそこを走り抜けている。

当時は同じ家格同士が縁戚を結んでいたもので、親戚には代官も多く、両家は直接には縁戚ではないものの、間接的に親戚が重なっているところから、文化文流を縁に年長者が師となって文化普及に貢献していった。大高文徳（亀足）は季語辞典の先駆者として俳句の普及に貢献したが、そのために俳句を俗化させてしまったことはゆがめないものの、その人徳は立派な生涯であると弟子の蕨楊心は「文徳先生の墓を弔う文」に綴っており、その筆跡は芸術的である。その後の大高秀明（東園）は「師蕨蘭窓翁を船遊びに誘う」と題した漢詩を綴っているがこの東園こそ伊藤左千夫が多くの感化を受けた国学者として、二七歳の時、祝詞（神道書）の解説書上下二冊を出版した人物である。出版された二冊を国学の大家師平

田篤胤に謹呈した折、神道界発展のため手厳しく教導するとの言葉添えの元、朱筆にて訂正されているが、これにて数千名の門下生達の指導法が判明したと佐倉の歴博で特別展示されたほどである。学者として知られる蘭窓翁こそ阿羅々木と冠した文学誌発行にかかわったのに何故見逃されていたのか残念である。推測するに江戸時代の火災焼失のため、証明するだけの古文書不足によるのではなからうか。大高総本家も藩主来訪の折、築城談にて裏の善兵衛森の巨木を献木した後、大規模な山崩れで土中に埋没したが、我家の古文書から読解できたため、略文ながら一つの説として載ければ幸いである。

「夢の浮橋」まで一四年の語り行脚

——京ことば源氏女房語りの雅びな旅

埴谷 大掛 史子

生粹の京都人中井和子氏（京都府立大学教授）の『現代京ことば訳源氏物語』（大修館書店）全五冊の朗読（今女房山下智子氏による背景の解説と女房語り）は、コロナ禍での三年の中断を挟み、十四年の歳月を渡り、いまま最終帖「夢の浮橋」を語り終えようとしている。この語りが宇治十帖に入ったのはコロナ騒動の前だったが、「浮舟」の帖に入ったところで集会が制限され、約三年の空白に耐えなければならなかった。宇治十帖は光源氏の子や孫の世代の恋模様が宇治を舞台にくり広げられ、現代小説をも凌駕するストーリー性と各人物の個性が浮き彫りとなる説得力のある筋立て、展開が鮮烈に読者に迫る。源氏の子薫大将と孫の匂宮相方からの愛の狭間で揺れもがく浮舟は、苦しみから逃れるため宇治川に身を投じようと出奔するが、横川の僧都に助けられ、その妹尼が亡くした娘の代りに観音から授けられたと喜んで世話をし、その美しさに言い寄る男も出てくるものの、浮舟自身は強く出家を望み、僧都に頼んで落飾し誦経の日々を送る。忽然と消えた浮舟は遺骸もないまま葬儀を出され、

その唐突な死は匂宮を病にさせ、薫に衝撃と悔いを与える。浮舟の弟の少年を使者に薫は浮舟に文を送るがもはや浮舟はそれを手に取り目を通すことはない。

『京ことば訳源氏物語』はこう結ばれる。

「まだかまだかとお待ち遊ばしてたのに、こうして頼りないまま帰ってきたので、心がすさび、なまじいなことやったとお気持ちさがさまに動いて、誰かが内緒で据えているのかと、御自身あれこれお気が回り、宇治に放っておきやした御経験からも、と、そう、本にござります。」（「夢の浮橋」の巻）

この京ことば訳源氏の訳者中井和子氏は、「方言の中には、未だ自然性は保たれており、まして『源氏物語』を育くんだ京都の土壌では、人はなお自然と融合しながら生きていると思われ、京ことばの、あの幾重にもつぎ足し重ねて語られる表現の方法には、古い日本の表現の仕方が残っていると思われるから」京ことば訳『源氏物語』に挑んだと述べている。

この京ことば訳源氏物語を現代の女房語りとして声優山下智子氏が語りライブを始めてからコロナ中断期を挟み一四年経つ。今女房と自称し周囲も認めている山下氏は、中井和子氏の門下で『源氏物語』の探求者、仲代達矢無名塾で学んだ女優でもあり、NHKラジオドラマの

レギュラー出演者でもあった。いつも季節や語りのテーマに合わせた気品ある和装で、立居床しい美貌の語りべ、「みなさま、ようおこしやしておくれやす」と壇上から語りかけられると、大の山下智子ファンの山折哲雄氏(宗教学者)ならずとも聴衆はたちまち京ことばの語りの世界に惹き込まれる。一か月置きの語りの会場は、京都では寺社や能楽堂など格式高く、東京では折々に情緒あふるる場所を経巡ってきたが、初期の頃は法政大学文学部教授の古川博資氏の邸内にある文化財展示や行事用の倉で行われ、お倉の源氏と呼ばれていた。やがて古川氏が法政大学二部(夜間)授業の一環として開催、学生や私共一般聴衆も共に、市ヶ谷の五五年学舎と呼ばれる古びた鉄筋コンクリートむき出しの教室で何回か聴いた。殺風景な教室だったが華やいだ帯など飾り、和装の美しい語りべが登場し、京ことばのおやかな響きが流れはじめるともうそこは源氏物語の雅びな宇宙となるのだった。「若紫」の帖を語ったときの今女房は涼しげなゆかた姿で何とも可愛らしく、その折の若紫の声の愛らしさ、おばあさまの気品あふれる声の抑揚は忘れがたい。

北鎌倉円覚寺境内の大正時代の僧坊「龍隠庵」での語りは二年ほどだっただろうか。山道を登った上に小芝垣があり、どこかに龍がひそんでいそうなほの暗い座敷に

上がれば、若い僧がお抹茶とお菓子を運んできて床しい所作で出してくれる。「夕顔」が語られたときは折しも激しい雷雨となり、まさに若き源氏が夕顔を連れ込んだ某の院の趣き。伊東深水面伯旧邸の和の粋も語りを引き立てた。明大前のキッドアイラックアートホールでの語りが数年続けられたのは、持ち主である無言館館長の窪島誠一郎氏(水上勉氏子息)の支援によるところが大きく、いま最終回を迎えようとしているここ数年の会場は成城学園駅近くの高山辰雄画伯旧アトリエの第Q藝術で、毎回高山画伯の源氏絵が女房語りを盛り立てている。

今女房は語りに入る前、壁面に掲示した登場人物の血縁関係、位階などの図により、語られる人物の位置関係をうながす。灯火が消され、数秒間の闇と静寂の後、幻のように語りべの姿が浮き上がると、卓上の五つの鐘がおもむろに鳴らされて、もう聴き手と語りべの結果は消え失せる。龍隠庵での語りの折、鑄物作家による稀有な音色の五枚組お鈴の皿は、語りべとの運命的出会いにより今女房のものとなって、京ことば源氏語りの名脇役を務めつづけている。美しい音色に導かれての女房語りの旅は遂に最終帖「夢の浮橋」にたどりついたが、また心新たに「桐壺」から聴きたいとの圧倒的多数の願いによ

り、今女房と聴き手の雅びな旅は続いていく。

「どの天子さんの御代のことでござりましたやろか。女御や更衣が大勢侍つといやしたなかに、そないに重い身分の方ではござりまへえで、それはそれは時めいといやすお方がござりました。」（京ことば訳『源氏物語』桐壺の巻）

〈参考文献〉

『現代京ことば訳源氏物語』全五卷

中井和子著 大修館書店（初版二〇〇五年六月二〇日）

臺名を被り蝦夷地へ

寺崎 戸村 茂昭

川黒江町にへ罷出、住居仕罷有候。

寛政十二年庚申二月十五日 司天台高橋先生より御手紙：
紙：

「然ば急に御眼に掛り御相談申し渡し儀之有候間：是非今日中に御目にかかり申さず候ては、相成り申さず候儀に付き早々に御意を得たく候。

勘解由様

作左衛門

張り詰めた様子の書き出しで始まった師匠からのこの手紙こそ、無名であった商人あがりのご隠居・伊能勘解由（諱忠敬）の人生が天地がひっくりかえるほどに激変することになった知らせであった。

この日から紆余曲折があり三か月後の閏四月五日に、蝦夷地測量の仕方について、松平信濃守（二年ほど前に幕府が蝦夷地を直轄化する際に蝦夷地取締御用掛の筆頭に任命され、蝦夷地探索・調査の経営方針策定に関わったことで知られる）から蝦夷測量について問い合わせがあったことから、忠敬は次の書付を提出した。

私儀、寛政七乙卯年五月（当時五十一才）、御当地深

伊能勘解由

前々より天文曆学地図等相学候所、六か年以前、高橋作左衛門儀、御用に付罷下り候節より門弟に罷成、天文曆学測量出精仕候。

地図を精敷認候術は、第一は北極出地度、其次は方位に御座候。（以下、省略）

この書付をもってようやく蝦夷地測量の沙汰が閏四月十四日に降りたのであった。

つまり、一介のご隠居でありながら蝦夷地の測量が伊能忠敬に任された真相は、測量の仕方として、それまでの一般的な測量方法であったところの太閤秀吉の検地で行われていた旧態依然とした測量方法ではなく、最新科学であるところの「天を測って観測地点の地球上の位置を求める」という斬新な点を松平信濃守が評価したことにあつたのである。

そして、その五日後になり蝦夷地測量への第一歩が次のように踏み出されたのであった。

寛政十二庚申年閏四月 台命を蒙り、蝦夷地に下向し

ける道中の記。

閏四月十九日 朝五ツ前深川出立。上下六人、伊能勘解由、門倉隼太、平山宗平、伊能秀蔵、下人佐原吉助、新に召かかえ候長助なり。此日朝より小雨、昼後に止、深川八幡宮参詣。それより両国通り浅草司天台へ立寄、高橋先生にて御酒を給。

荷物は深川より直に千住宿へ積送。千住宿にて不残中食、酒肴を以宴別。千住より草加宿へ二里八町、草加より越谷へ一里二十八町、越谷と並ぶ番駅の大沢宿に七ツ頃着して、中嶋屋善太郎という家に止宿。

ところで、この出発日は太陽暦では六月十一日にあたっていた。また、表向きの測量は蝦夷地の地図作りであったが、忠敬や師匠たちの本音は「地球の大きさ」を確かめることにあったので、本来であれば本州部分も夜は天を測つて緯度（北極出地度）を求め、昼間は地を測つて緯度一度の距離を緻密に求めなければならぬのであったが、それでは蝦夷地の測量が終わる前に測量そのものが不可能になる冬になってしまう恐れが危惧されたことから、本来であれば縄を張つて距離を測るところを、往路では原則として、歩測による測量だけに徹する方針で一日当たり十里を目途に急ぎに急いで進んだのであった。

その結果、僅か二十日程で津軽海峡本州側の三厩に到着できたのだが、この季節はヤマセという北東風が吹き荒れる時期に当たっていたことから蝦夷地に行く船便の欠航が続き、三厩に九日も逗留することになってしまい、加えて三厩から箱館に直行する計画も風に阻まれて箱館よりも西寄りの松前領吉岡という漁村に着いてしまったのであった。

その後も、例えば、

七月二日 薄雲、夜も同じ。朝五ツ頃砂馬仁出立。海岸砂小石交り、又は大石を積に似たる道にて行路難し。又海岸に高くそびえたる大岩を上下する所あり、甚危し。又汐間を見て走る所あり。案内に蝦夷人を連れけれど折ふし潮満て渡ること難く、或は汐にぬれ三・四町も立帰る。「念仏坂」といえる蝦夷人のみ往来する險阻なる山越をなし、ポロマンベツといえる川へ出、念仏坂の下より海岸を通れば道路大いに近し。川を越えて休所あり。十四・五町行てオトロシヤンナという所にて中食。それより海辺、又は新道二里三十町余。夜に入り五ツ頃ホロイヅミに着。御詰合支配殿、会所支配人へ被迎合、半町程御用提灯にて迎に人夫を被遺候。終日難所、ぞうりもことごとく切れ破れ、素足になり甚困窮の所迎提灯にあいしば、俗語にいえる、「地獄に仏ともいふべし」。里数七里

といえど八里余もあるべし、此上汐干といえど通るべからず、併し新開山道も行路難のよし。仮家に止宿。夜五ツ着。

という難儀にあつたりしたことから、蝦夷地東岸のニシベツ（現在の別海）で蝦夷地一周の測量を中断して帰路に就き、十月二十一日（太陽暦の十二月七日）江戸に帰還したのであつた。その日の日記

閏月の中の九日（四月十九日）に立出しより、今日神無月末の一日まで、年半に余り二日をなん旅行しける。

往古より、遙遠事を津軽、合浦、外ヶ浜と云侍りければ、外ヶ浜をなん生涯に行は難しと覚えける。いわんや外ヶ浜より又大海を隔たる上に、寒冷卑湿の二百余里もありける蝦夷の西別という所迄往来しけるに、供したるもの四人とも一日の病もあらず、無事に帰府しぬるは誠に、台命の辱と祖神の霊にあらずんば、いずれぞ如斯ならんと難有感じ侍る。

という偽りのない感想を述べたのであつた。

その後、堀田撰津守へ完成した蝦夷の地図を提出し、それに添えて今回の測量の顛末を文書で以下のように提出したのであつた。

十一月初より蝦夷地より本州行程図に昼夜取かかり仕立申候。津宮久保木太郎右衛門、門倉隼太、平山郡蔵、

栄女等手伝致し候。漸十二月二十日頃迄に出来上り、二十一日御勘定所へ持参候。大絵図二十一枚、内十一枚は日本地。十枚は蝦夷地。

私儀、此度蝦夷地測量御用被仰付、彼地へ罷り越、その場所場所にて北極出地度、並、方位測量仕候に付、御用地東蝦夷海辺行路の地図相仕立差上申候。

一、北極出地度の儀、泊々にていづれも象限儀を相用、恒星中の大星をえらび天氣曇り見えがたき節は五、六星、晴天の夜は二、三十星も皆その地高度を測量仕、兼て測置候恒星赤道緯度を相用、その所の北極出地度を相求め申候。北極出地度を一星毎に如此仕り其中取り候て、其の地出地度と相定申候。

一、蝦夷地道路の儀多は海辺のみに御座候得共、海岸通行不相成所、又は満潮にて往来難相成、山越を通行仕候処も相測り候上、人歩も少、且止宿仕候所も、その場所の外は中途の止宿は無之様に承及候に付、北極出地度を相測候。且又、道路里数の儀は往返、日数の限も有之候間、一々間棹間繩等相用候儀も難仕間、歩行の足数を以、里数を相求め申候。尤、御府内より蝦夷地の極東ニシベツの地に至り候迄不残足数相記し、海川の外は險難の山道にても一步も相漏し不申候様相測候て、所々の里数を相定申候。

右、北極出地度と道路の方位の三数を兼用候て絵図相仕立申候。尤、北極出地度の儀は数十星相測り、その中を取用候。方位並里数の儀は密測とは難申御座候間、少々の差の儀も可有御座候。またアツケシよりノコベリベツ、アンネベツ、ニシベツの間、海川山沢、相難り候故、方位、里数共密測難仕候間、メアカン、オアカンの遠山を測量仕、その所北極出地度を兼用候て絵図仕候。ネモロ、並、クナシリ島へは相渡り不申候故、ニシベツの地より測量仕、その大概を図面へ書載申候。

一、所々にて相測候、北極出地度を以、御府内より仙台、仙台より南部、南部より野辺地、又は御府内より南部、野辺地と足数の里数、方位を相用て南北直径里数相求、引合推算仕候所、地上南北一度里数すべて二十七里余に相当申候。蝦夷地の測量相用推算仕候ても同数に相成候。依之、一度の里数二十七里に相定絵図仕候。南北兩地二十七里直径にて相離れ候得ば、北極出地度一度の差に相当り申候。右の通御座候。以上。

申十二月

伊能勘解由

以上が測量日記抜粹による蝦夷地測量の梗概である。これを読むと、伊能測量のこれまでの通説とされて説明されてきた地上測よりも、天を測って北極出地度(緯度)を求めるといふ科学的測量が重要であったことが明らか

である。にも拘わらず、伊能測量のドラマや解説番組などでは天を測るといふ科学的側面の説明が殆ど無かったことが改めて異常に感じられる。何故であろうか？

筆者は、そのことをある出版社に尋ねたことがある。その答えは「科学的な理系の図書や番組は売れないからである」とのことであった。

明治時代の世界が驚いた日本の近代化やソニーやシャープなどの日本の工業製品が元氣であった昭和の後半から平成の前半までは、確か「科学立国日本」という言葉が巷間うやうやに流れていたように記憶しているが、スマートフオンの普及とともに日本が元氣を失ったのは、このような出版社やマスコミの売り上げ至上主義の蔓延にあるのではなからうか？

〈参考文献〉

・「伊能忠敬測量日記」伊能忠敬記念館所蔵

坂東における藤原氏と源氏

藤原鎌足から源義経まで

千葉市（元下布田） 田野 圭子

はじめに

自分の家に伝わる義経伝説と絵馬を調べているうちに、藤原氏と源氏が意外に深い関係があることに気が付いた。千葉県には源氏にまつわる伝説があちこちに残っている。それらを追っていくと藤原黒麻呂と河内源氏との関係が重要なことがわかった。

藤原鎌足と坂東

藤原鎌足（中臣鎌足）は飛鳥時代の貴族・政治家で、大化の改新の中心人物である。改新後も中大兄皇子（天智天皇）の腹心として活躍し、臨終に際して大織冠とともに藤原姓を賜り藤原氏の始祖となった。藤原氏と坂東は鎌足の頃より非常に関係が深く、いろいろな伝承が残されている。それらの伝説から坂東と藤原氏の間を見ることが出来る。

木更津の「鎌足桜」

千葉県木更津市鎌足地区には鎌足伝説があり、「鎌足桜」という桜を保存している。

今から一四〇〇年ほど前のこと、矢那の郷に大化の改

新で功を成した大織冠藤原鎌足公の祖父猪野長官が住んでいた。長官は五〇歳を過ぎても子宝に恵まれなかったため、高倉観音に参籠し子授けを祈願した。満願百日目に妻が身ごもり、ようやく女の子を授かった。観音様の霊験によつて授かったので子与観しよかんと名付けられ娘は大事に育てられた。

しかし、年頃になっても嫁ぎ先がなかなか決まらなかったため、再びご利益を賜りたく観音様に祈願したところ、縁あつて常陸国鹿島に嫁ぎ、男の子を授かった。出産の時、一匹の白狐が産所に現れ、草刈鎌を授け、「この鎌は敵を切るに鋭利、国を治め幸福を得るに良し。命ずるとおりに所持せよ」と言つて、その姿は消えてしまった。そこで、生まれた子どもに「鎌子」と名付けた。この子が「中臣鎌子」後の「藤原鎌足公」と伝えられている。

藤原鎌足公が、高倉観音へお礼参拝のためにこの地を訪れたとき、持っていた桜の木の「杖」を傍らの土手に挿して旅装束に着替えた。桜の木の「杖」は、そのまま根付いた。その後、土地の人々は鎌足公に因んで「鎌足桜」と呼ぶようになったとのことである。

「鎌倉」地名の由来

鎌足の出生地は「藤氏家伝」によると、大和国高市郡藤原（奈良県橿原市）。また大和国大原（現在の奈良県

明日香村)や常陸国鹿島(茨城県鹿嶋市)とする説もある。この茨城県鹿嶋市の鹿島神宮、千葉県香取市の香取神宮とともに藤原氏から氏神として崇敬されており、奈良時代の平城京の守護と国民の繁栄を祈願するために創建された中臣氏・藤原氏の氏神を祀る春日大社は、主祭神のタケミカヅチが鹿島神宮から遷る際に白鹿に乗ってきたとされている。『詞林采葉抄』^{しりんさいようしょう}によれば、鎌倉という地名は中臣(藤原)鎌足に由来するという。鎌足が宿願をはたすために鹿島神宮に参詣した帰り、由井の里に泊まった。その夜霊夢を感じ、持っていた鎌を大蔵松岡に埋めたことから、鎌倉と呼ばれるようになったといわれる。この本には、鎌足の子孫の染屋時忠が、文武天皇から聖武天皇の時代にかけて東八ヶ国の惣追捕使になり、東夷を鎮め国家を守ったと記されている。

一方、藤原房前(藤原北家の祖)は鎌倉の長谷寺を天平八年(七三六)に開山したという寺伝がある。右大臣であった房前が鎌倉に足跡を残していることは、藤原氏の氏神である春日大社の神が、神護景雲二年(七六八)に鹿島神宮から勧請されたことと合わせ注目したい。藤原氏と鎌倉は関係が深いのではないかと推測される。

藤原黒麻呂と藻原荘

その鎌足から四代下った子孫に藤原黒麻呂がいる。黒

麻呂は高祖父・鎌足・曾祖父・不比等―祖父・武智麻呂―父・巨勢麻呂―と続く南家藤原氏であり、奈良時代末期から平安時代初期にかけての貴族である。宝龜五年(七七四)三月、上総介に任ぜられ上総の国府に赴任した。

国府は現在の市原市惣社にあり、着任した黒麻呂は上総国内を巡視し、未開の原野であった茂原を開墾して私有地(牧野)とし藻原荘として成立させた。藤原黒麻呂の藻原荘は、数少ない王臣家に領有された初期荘園である。

黒麻呂の牧野となった茂原は、黒麻呂―春繼―良尚―菅根と引き継がれ、開墾された。

藤原氏と河内源氏

この黒麻呂の子孫である藤原保昌(摂津守、日向守、肥後守、他、妻は和泉式部)の姉妹が源満仲と婚姻関係を結び、源頼信(河内源氏の祖)が誕生した。源頼信は平忠常の乱後、坂東の武士と主従関係を結び、後の東国支配と武家源氏の主流となる礎を築いた。このような頼信の坂東進出の背景には、祖父経基・父満仲や叔父満政らが武威・常陸の国司を務めた地盤の存在と、母方である藤原氏の強固な地盤がこの地に存在していたことも考えられる。

藤原氏から平氏へ

坂東には藤原氏に代わり桓武平氏の平高望が昌泰元年

(八九八) 上総介に任じられ、国司として入ってきた。息子の国香、良兼、良将らも関東にとどまり、さらに勢力を強化していった。ところが、良将の子将門が承平五年(九三五)に反乱を起こし、同じ平家の平貞盛や藤原秀郷(俵藤太)に討伐されてしまう。その後平氏と藤原氏が坂東の覇権を争い、平氏がこの戦いに勝利し隆盛を誇ることとなった。しかし、この繁栄も長元元年(一一〇二八)に平忠常(平良文の孫)が反乱を起こしたことに、より忠常は討伐された。忠常が戦わずして降伏したのは、平忠常の乱の二〇年ほど前に源頼信が忠常を降伏させ家来にしたことが理由の一つとされる。

平氏から源氏へ

忠常の反乱を討伐するために派遣されたのが、河内源氏の源頼信である。頼信の子が前九年の役で活躍する頼義、孫が後三年の役で大将をつとめた八幡太郎義家である。この血脈は義親、為義、義朝、そして鎌倉幕府を開いた頼朝へと受け継がれていく。

平忠常の乱の後、平直方は源頼信の息子・頼義を婿に迎え坂東における地盤を譲る。鎌倉はこの時に直方から頼義に譲られたものといわれる。頼義と直方の娘の間に生まれた長男が、八幡太郎として有名な源義家なのである。鎌倉も藤原鎌足が由来とされる伝承がある。坂東を

治めた武門源平両氏の嫡流の血を引く義家は、藤原黒麻呂の血も引く貴種であった。このように、河内源氏と坂東は深い縁があることにあらためて注目したい。

源氏と奥州藤原氏

後三年の役後、奥州藤原氏が成立し奥州藤原氏の祖・清衡は朝廷や藤原関白家に砂金や馬などの献上品や貢物を欠かさなかったため、朝廷は藤原氏を信頼し、事実上の奥州支配を容認した。源義朝の父・為義は近江に下向し在地武士の佐々木氏と主従関係を結び、佐々木氏は奥州藤原氏と婚姻関係を有しており、これにより為義は、奥州の馬・砂金・鷲羽(矢羽根の材料)などを調達するルートを確保することができた。源義朝も平治の乱まで奥州とは深い関係を有し、佐々木秀義を奥州に派遣し、馬・武器を購入していた。義朝は、奥州藤原秀衡に娘を嫁がせている藤原基成とも密接な提携関係を結んでいる。また、義朝の側室であり義経の母・常盤御前は一条長成と再婚した。その一条長成は藤原基成の父・忠隆と従兄弟であり、長成が義経の保護を藤原基成に頼んだといわれる。藤原基成も義朝との密接な関係が義経を平泉に招いた一因であるとも考えられる。

義経伝説の再検証

千葉県には義経が訪れたといわれるいすみ市飯縄寺、

銚子の「義経伝説」、牛若丸の絵馬がある大網白里市の縣神社、東金市の日吉神社、山武市雨坪あめつぼの東源寺・不動尊堂にも義経が通ったという伝承が残されている。東源寺の向かい側の武勝むしやうには金売り吉次の曾祖父・こう吉の屋敷があり、義経は吉次の百名の要員の行商団に紛れて奥州へ向かったという。藤原黒麻呂が茂原に赴任してから河内源氏と藤原氏、奥州藤原氏の関係が密接に繋がるのである。源頼信の坂東進出の背景に、母方の藤原黒麻呂の強固な地盤が存在していたのであるから、奥州藤原氏と最も縁のある義経の伝承は黒麻呂の地盤を通る地域にあるのである。鞍馬寺を出奔し奥州へ下る際、『平治物語』では近江国蒲生郡鏡の宿で元服したとする。『義経記』では父義朝の最後の地でもある尾張国にて元服したとされる。そこから先の奥州までのルートはわかっていない。義経は頼朝との決別の後、北陸廻りで奥州へ逃れたというイメージが強いが、茨城県にも多くの義経伝説が残されていることから、この千葉県にある伝承を頭から否定することはできない。千葉県にある義経伝説も改めて考えていく必要があると思われる。

〈参考文献〉

『南家黒麻呂流藤原氏の上総留住と「兵家」化』 野口

実 政治経済史学一九九六年九月

『上総国藻原荘について「施入帳」の検討を中心として』

加藤友康 千葉県史研究 第三号 平成七年三月

「藻原荘」は、藻が茂る土地だったのか 藤原黒麻呂の

牧 堺谷純子 長生・夷隅の歴史木更津市鎌足桜保存会

『源義経』 元木泰雄 吉川弘文館

『源義経 流浪の勇者 京都・鎌倉・平泉』上横手雅敬

文英堂

『源氏の血脈』野口実 講談社学術文庫

『坂東武士団と鎌倉』野口実 戎光祥出版

『源氏と坂東武士』野口実 吉川弘文館

「地域の歴史を求めて―葛西氏とその時代―」葛飾区郷

土と天文の博物館 崙書房

中西三郎先生の文藝活動（六）

九十九里町（元市内在勤） 齊藤 功

旧制成東中学校在学中の文藝活動（後半の四）

文学方面、特に詩歌に活路を見いだした先生は、大正六年（一九一七）中学五年生の夏休みに貴重な体験をした。小説家徳富蘆花（明治元年～昭和二）との出会いである。

この年の春、蘆花は創作活動の心機一転をはかり、蘆花夫妻の定宿としていた群馬県の伊香保温泉千明仁川邸に静養していた。そして夏は千葉県外房の九十九里浜での生活を計画した。そこで、蘆花に心酔していた九十九里浜片貝に在住の中西忠吉（月華）に避暑生活の斡旋方を依頼した。同年五月五日付、千明仁川邸別荘の絵はがきには、次の如く認めてある。

四月廿七日家を挙げて伊香保に参り、下の別荘に自炊生活を致居候。（中略）今年は春を山に、夏は久しぶりに、海辺の生活を致度、格好の貸家でも有之候は、お世話願度候。（注一）

月華は快諾。熟考の結果、日中の滞在宅は月華の長女マリの病氣療養の為に建てた別荘（蘆花はこの別荘をマ

リの名に因んで「茉莉の舎」と命名した）。寢所の間借先は前豊海村長篠崎喜太郎宅（屋号ぬまや）となった。両所とも旧豊海村粟生地区である。両者とも現存しないが、前者は水産加工業三五郎商店の後方空き地、後者はその近くの龍神社前の地に比定できる。

七月一日に相当の家財道具などを持参して来着。その後まる一か月この地で避暑生活を送った。その間蘆花は、人の来訪を嫌って中西月華ほか限られた者としかかわなかった。なお、この頃蘆花は詳細な日記をつけていた。先年、この日記が翻刻され、『蘆花日記』として筑摩書房より刊行された。全七巻。昭和六十年六月～六十一年七月。吉田正信校注。九十九里滞在中の日記は、第五巻に収録。同書七二頁～一七三頁。「大正六年夏七月 九十九里日記 茉莉の舎にて書く」と表題があり、別荘を「茉莉の舎」と命名した由来を記す。

「大正六年七月二日午后二時半、上総の九十九里浜の茉莉の舎で此日記を書きはじめる。茉莉の舎は、片貝の薬剤師中西忠吉君の長女まり子が肺病に罹り静養一年の後、永眠した粟生海浜松原の中の小さな別荘である。中西君は愛女の為に此別荘を建てたのだ。同女の一周忌に中西君が出した記念冊子「思出草」で同女と此別荘の写真を見てから、九十九里の浜なる斯小さなしめやかな

SorrowのSceneは余の心に触れた。そこで斯夏を海辺に送るときめた時、夫婦見に来て読み書き観ずる家として、茉莉舎の舎を択んだのである。まり子の家と云ふので、茉莉舎と命名した。」

『蘆花日記』（以下『日記』と略記）と前掲注一の『徳富蘆花の「九十九里」注釈』（以下『九十九里』と略記）には、七月一日、東金駅に到着した蘆花一行を中西月華と三郎先生外一人の三人で迎えた。二日後、蘆花のもとに先生の新体詩が届く（『日記八四頁に「中西三郎から新体詩。」とある）。五日目家財道具の運搬などを手伝ってくれた文学少年三郎に対して蘆花は、自作の歌を書いて贈っている（『日記』八八頁）。

「中西三郎にはがきを出す。九十九里其長浜をの歌と、吾がむねに響きかはしてわだつみの千尋の底ゆ鳴りわたるかな」の歌を画はがきに書いてやる。」

小説『不如帰』で一躍有名小説家となった蘆花は、その後も『自然と人生』他を著していた。文豪の名にふさわしきこの蘆花から自詠の和歌を贈られた先生の悦びは、察して余りある。敢えて言うならば「欣喜雀躍の体」で

あっただろう。と言うのも私は後年、古稀に近い先生の授業や私生活の姿を拝見しているからである。古典の授業中、雑談として「歌舞伎」の所作を話して下さった折、役者の言い回し、例えば歌舞伎十八番の「勸進帳」安宅の関で、市川團十郎扮する弁慶の名場面をその小柄な体を振り振り演じて下さった。またお宅に伺った時、私の持参した幕末の漢詩人大沼枕山ちんざんの詩をご覧になった時は、小声を出して読まれ微笑みながら独り言のように「やあ、実に面白い」と仰った。この二つの場面が印象に残っている。

先生は蘆花から多大な感化を受けて、ますます文学、詩歌の勉強に精進されたことは、想像に難くない。もとより先生の父月華は後年、蘆花に因んだ句碑「芦花乎里志茉莉乃屋野阿登松能波奈（ろかおりしまりのやのあとまつのはな）」の句碑と「逍遙芦花先生曾遊之地」と刻した石柱を自邸に建てた。また、昭和四年（一九二九）九月発行の雑誌『大地の群』創刊号に（注二）、「徳富健次郎先生の思ひ出」を載せている。

蘆花の『新春』発行の大正七年（一九一八）四月のひと月前、地元豊成村高倉（現東金市）の人、鈴木啓助が同人誌『趣味の友』（三月号）を発行した。同誌に中西先

生の作品「蠅の運命」が掲載されている。これまで紹介してきた七五調の詩と異なる作品である。

蠅の運命 成中 中西三郎

ギヤマンの小壺！

匂ひ濃きみどりのインク！

そのおもてに一匹の蠅は溺れて、

あがき、もがく両のつばさ。

喘ぎ、疲れ、力は尽きぬ。

生ある蠅の運命はいま、

小さき壺の中にあるかな。

机上の縮図よ！あゝ、人生も。

本誌の創刊は大正七年一月。毎月一回定期発行。第三号の一二頁に次の記事がある。

「茲に二月十一日紀元節の佳辰を卜して『趣味の友』第一回親睦会を催しぬ。左に当日の登壇者の氏名を掲げむ。」

一、開会の辞

一、成功の的

鈴木啓助君

鵜澤一夫君

一、成功と体力 小網喜作君

一、自己の眼に生きよ 戸田 實君

一、戦後と修養 矢野晃義君

一、農村青年の二傾向及批判 矢野良司君

一、靈魂のバプテスマ 中西三郎君

一、閉会の辞 鈴木啓助君

先生の演説の題「バプテスマ」とは、ギリシア語baptismaで「洗礼」のこと。これは父月華が、山武地方鳴浜村（現山武市）に布教に来遊した宗教者内村鑑三達と交遊した影響が考えられる（注三）。先生はこの時成東中学校弁論部の部長として意気揚揚であった。

中学一、二年生から五年生への精神的成長は、次兄甚蔵宛の葉書から伺える。

「拝啓 先日は中央公論など沢山お送（り）、引用者）下さって有難うございました。（大正六年五月六日夕）

今日「新春」を貰ひました。一円六十銭のを一円二十銭で売りました。最後に「九十九里」といふ長い篇があります。父上亡姉上忠雄君俊雄富江子が表れてゐます。父上の撮った写真が二葉あります。読了したら送りませうか？僕は正式に転学を許可され五年三組へ編入され、

今日授業を受けました。七時十五分の始業なので朝寝は出来ません。併し五限やって正午で終わりますから良うございます。成中（なるちゅう。成東中学の略称。引用者）より面白相です。（大正七年四月十八日夜）」

成東中学を卒業できず、東京の正則中学校へ転学した先生は、新たな文学的刺激を受けることとなった。

〈注〉

- 一 『徳富蘆花の「九十九里」注釈』の口絵写真に所収。東京成徳大学人文学部日本伝統文化学科鶴巻研究室発行。二〇一〇年五月。また蘆花夫妻の月華宛書簡の翻刻が同学科発行『房総を学ぶ7 房総地域文化研究プロジェクト記録集』（二〇一四年）に掲載されている。一〇五頁～一三九頁。

- 二 前掲『徳富蘆花の「九十九里」注釈』七四頁～七七頁に写真版で掲載。その解説に編集兼発行人は、東條高顕（千葉県東金町一〇三七）とある。

- 三 月華自身は友人海保竹松を通じ、内村鑑三によりキリスト教にふれていたし、その弟子である後にドイツの日本の大家となったウィルヘルム・グンデルト（Wilhelm Gundert）と親交を持ってその人格に触れて

いた。当然先生にもその感化は及んだ。先生は私に、「内村鑑三の膝に抱かれて親父と談話するのを聞いていた」と話された。